

日韓看護学生の死生観の比較

田代 隆良¹・出田 順子²・永田 奏²
安藤 悦子¹・崔 鎔赫³・白 明和⁴

要 旨 日本の看護学生127人、韓国の看護学生191人を対象に死生観を調査した。看護学生の死生観は日本、韓国とも「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「人生における目的意識」が高く、「死からの回避」「寿命観」「解放としての死」「死への関心」は低かった。両国を比較すると、「死への関心」は日本が、「死からの回避」「目的意識」は韓国が有意に高かった。「死への恐怖・不安」と「死からの回避」には強い相関が認められた。死にゆく患者をケアする看護者は「死への恐怖・不安」が少ないことが望ましく、子供時代から生と死について考える機会を持つとともに、講義や実習を通じた死の準備教育が両国において必要と考えられる。

保健学研究 19(1): 49-54, 2006

Key Words : 死生観, 看護学生, 日本, 韓国

はじめに

現代人の価値観は多様化し、生と死に対する考え方も一様ではない。そのような患者をケアする看護師には、自分自身の死生観を持つとともに、自分とは異なる様々な死生観があることを理解し、共感できる柔軟性が求められている¹⁾。さらに、地球規模で人の交流が進み、日本とは異なる歴史、文化、宗教、習慣をもつ人々をケアする機会も増えつつあり、日本人以外の死生観を理解する必要もある。看護学生の死生観に関し、学年間、講義あるいは臨地実習の前後^{2,3)}、看護学生と看護師⁴⁾、看護学生と他学部学生^{5,6)}などについて比較検討されているが、外国の看護学生との比較に関する研究は少ない。そこで今回、地理的、文化的に日本に最も近いと言われていた韓国と日本の看護学生の死生観を比較検討したので報告する。

対象と方法

1. 対象

長崎大学医学部保健学科看護学専攻の1年生と4年生および韓国晋州保健大学看護学部の1年生と3年生（晋州保健大学は3年課程）にアンケート調査を行った。長崎大学127人（1年生55人、4年生72人）、晋州大学191人（1年生97人、3年生94人）から回答が得られ、解析対象とした（表1）。

2. 調査方法

死別経験・臨終に立ち会った経験の有無、子供時代に

表1. 対象

		人数(女性/男性)	平均年齢(範囲)
長崎大学	1年生	55人(55/0)	18.7歳(18~21)
	4年生	72人(71/1)	21.9歳(21~39)
晋州大学	1年生	97人(84/13)	19.8歳(18~28)
	3年生	94人(69/25)	23.0歳(21~29)

における家庭での死の話題、宗教の役割、死生観に影響を与えた要因などに関し、選択回答形式で質問した。死生観については、平井ら⁷⁾が開発した「死生観尺度」を使用した（表2）。本尺度は、①死後の世界観、②死への恐怖・不安、③解放としての死、④死からの回避、⑤人生における目的意識、⑥死への関心、⑦寿命観、の7因子27項目で構成され、7件法（1.当てはまらない、4.どちらともいえない、7.当てはまる）により回答を求めるもので、死生観全体の特徴を網羅している。各因子に4つ（寿命観のみ3つ）の質問があるため、各因子の合計点を質問数で割り、平均点が4点以上を高い、4点未満を低いと判定した。質問票には因子名を記載せず、各項目をランダムに並び替えて使用した。

授業終了後の休み時間に研究の趣旨、倫理的配慮等について説明した後、同意が得られた学生に質問票を配布して無記名で記載してもらい、講義室出口で回収した（集合法）。韓国の学生には、日本語の質問を韓国語に翻訳し、同様の方法で実施した。

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻看護学講座
2 長崎大学医学部保健学科看護学専攻元学生
3 晋州保健大学国際観光学部
4 晋州保健大学看護学部

表2. 死生観尺度

- 第1因子 死後の世界観
- ・死後の世界はあると思う
 - ・世の中には「霊」や「あたり」があると思う
 - ・死んでも魂は残ると思う
 - ・人は死後、また生まれ変わると思う
- 第2因子 死への恐怖・不安
- ・死ぬことが怖い
 - ・自分が死ぬことを考えると不安になる
 - ・死は恐ろしいものだと思う
 - ・私は死を非常に恐れている
- 第3因子 解放としての死
- ・私は死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている
 - ・私は死を人生の重荷からの解放と思っている
 - ・死は痛みと苦しみからの解放である
 - ・死は魂の解放をもたらしてくれる
- 第4因子 死からの回避
- ・私は死について考えることを避けている
 - ・どんなことをしても死を考えることを避けたい
 - ・私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする
 - ・死は恐ろしいのであまり考えないようにしている
- 第5因子 人生における目的意識
- ・私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している
 - ・私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある
 - ・私の人生について考えると、今こうして生きている理由がはっきりとしている
 - ・未来は明るい
- 第6因子 死への関心
- ・「死とは何だろう」とよく考える
 - ・自分の死について考えることがよくある
 - ・身近な人の死をよく考える
 - ・家族や友人と死についてよく話す
- 第7因子 寿命観
- ・人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う
 - ・寿命は最初から決まっていると思う
 - ・人の生死は目に見えない力（運命・神など）によって決められている

3. 調査期間

平成17年8月～10月

4. 分析方法

統計ソフトはSPSS 10.0 Jを用い、死生観因子得点の2群間の比較はt検定、多群間の比較は一元配置分散分析、比率の検定は χ^2 検定、相関関係はPearsonの相関係数により統計処理し、有意水準0.05未満を有意差ありとした。

5. 倫理的配慮

本研究は、長崎大学医学部保健学科倫理委員会の承認を受けた。

結 果

1. 死別経験と臨終に立ち会った経験

死別経験があるものは、長崎大学94.5%、晋州大学80.5%と長崎大学が有意に多かった ($p<0.001$)。臨終に立ち会った経験があるものは、長崎大学16.8%、晋州大学39.8%と晋州大学が有意に多かった ($p<0.001$)。

2. 子供時代の家庭での死の話題

子供時代の家庭での死の話題に関しては、両大学とも「記憶がない」と答えたものが半数近くいたが、「大っぴらに語られた」と答えたものは長崎大学が、「自分へのけ者にされた」と答えたものは晋州大学が多く、有意差が認められた ($p=0.017$) (表3)。

表3. 子供時代の死の話題

	長崎大学 (%)	晋州大学 (%)
大っぴらに語られた	32.6	21.7
不快感があった	20.6	16.5
自分へのけ者にされた	0.7	10.6
タブーであった	3.2	1.6
語り合った記憶がない	43.1	49.7

($p=0.017$)

3. 死生観に対する宗教の役割

死生観に対する宗教の役割に関しては、晋州大学に「非常に重要」「やや重要」と答えたものが、長崎大学に「全くない」「ほとんどない」と答えたものが多く、有意差が認められた ($p<0.001$) (表4)。

表4. 宗教の役割

	長崎大学 (%)	晋州大学 (%)
非常に重要	0.0	11.6
やや重要	22.1	25.2
さほど重要ではない	22.4	30.8
ほとんどない	26.9	18.3
全くない	27.9	14.1

($p<0.001$)

4. 死生観に影響を与えた因子

自己の死生観に影響を与えた因子は、長崎大学、晋州大学とも「身近な人の死」が最も多く、次いで「テレビ・映画」「葬儀への参列」であるが、いずれも長崎大学の方が有意に多かった。「自分の病気」は両大学とも最も少ないが、「家族の病気」は長崎大学18.9%、晋州大学

8.4%と長崎大学が多かった。「宗教」は長崎大学3.9%、晋州大学12.0%であり、晋州大学が多かった。「読書」は長崎大学19.7%、晋州大学5.8%であり、長崎大学が多かった。「講義」も長崎大学21.3%、晋州大学4.7%と長崎大学が多いが、「実習」は長崎大学18.1%、晋州大学13.6%と、有意差はなかった(図1)。

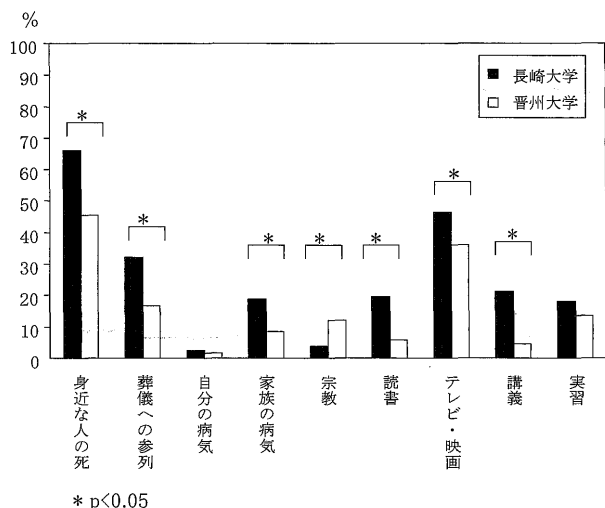


図1. 死生観に影響を与えた因子

5. 死生観尺度

両大学とも「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「人生における目的意識」の得点が高く、「死からの回避」「寿命観」「解放としての死」「死への関心」の得点は低かった(表5)。両大学を比較すると、「死への関心」(p=0.023)は長崎大学が、「死からの回避」(p<0.001)、「人生における目的意識」(p<0.001)は晋州大学が有意に高かった。

「死への恐怖・不安」と他の因子との相関をみると、長崎大学では「死からの回避」と強く相関し(r=0.451, p<0.001)、「死後の世界観」とも弱い相関(r=0.177, p=0.046)が認められた。晋州大学でも「死からの回避」と強い相関(r=0.529, p<0.001)があり、「死への関心」(r=0.205, p=0.004)、「死後の世界観」(r=0.169, p=0.019)とも相関が認められた(表6)。また、「死からの回避」は長崎大学、晋州大学とも「死への恐怖・不安」とのみ強い相関が認められた(それぞれr=0.451, p<0.001とr=0.529, p<0.001)。

死別経験の有無で死生観を比較すると、死別経験のあるものは、長崎大学では「死からの回避」傾向が強く(p=0.040)、晋州大学では「死への関心」が高かった(p=0.010)。また、臨終に立ち会った経験のあるも

表5. 死生観尺度の因子得点

因子	長崎大学 平均値 (SD)	晋州大学 平均値 (SD)	t 値	有意確率
死後の世界観	4.50 (1.12)	4.60 (1.22)	-0.749	0.454
死への恐怖・不安	4.42 (1.36)	4.30 (1.61)	0.673	0.501
解放としての死	3.27 (1.18)	3.40 (1.33)	-0.908	0.365
死からの回避	2.73 (1.08)	3.26 (1.25)	-3.929	0.000
人生における目的意識	4.11 (0.98)	4.77 (0.98)	-5.952	0.000
死への関心	3.75 (1.15)	3.43 (1.25)	2.292	0.023
寿命観	3.45 (1.47)	3.23 (1.38)	1.353	0.177

表6. 死への恐怖・不安との相関

因子	長崎大学		晋州大学	
	相関係数	有意確率	相関係数	有意確率
死後の世界観	0.177	0.046	0.169	0.019
解放としての死	0.061	0.497	0.057	0.437
死からの回避	0.451	0.000	0.529	0.000
人生における目的意識	0.044	0.627	0.016	0.822
死への関心	0.137	0.124	0.205	0.004
寿命観	0.034	0.701	0.065	0.372

のは、晋州大学ではやはり「死への関心」が高かった ($p=0.014$)。

子供時代の家庭での死の話題が「大っぴらに語られた」ものとそれ以外に分けて比較すると、長崎大学では「死からの回避」が有意 ($p=0.002$) に低かったが、晋州大学では「死への恐怖・不安」 ($p=0.023$)、「死からの回避」 ($p=0.040$) は低く、「死への関心」 ($p=0.021$) は高かった。

宗教が死生観に影響を与えると考えるものは、長崎大学では「人生における目的意識」 ($p=0.039$) と「死への関心」 ($p=0.022$) が高く、晋州大学では「死後の世界観」 ($p=0.014$)、「死への関心」 ($p=0.014$)、「寿命観」 ($p=0.032$) が高かった。また、死生観に影響を与えた因子として宗教をあげた人は「死への恐怖」 ($p<0.001$)、「死からの回避」 ($p=0.002$) が有意に低かった。

考 察

死に関する研究は、1950年代から欧米の心理学者を中心に始まった。日本でも1970年代後半には死の臨床研究会が発足し、死をタブー視していた時代から、死を見つめようという時代になってきている。また、各国で死生観に関する研究がすすむにつれ、民族や文化的背景によって、死生観にも違いがあることが明らかになってきた⁸⁾。本研究では、日本の長崎大学と韓国の晋州保健大学の看護学生の死生観について調査を実施した。看護学生の死生観尺度の因子得点は、日本、韓国とも「死後の世界観」「人生における目的意識」「死への恐怖・不安」が高く、「死からの回避」「寿命観」「解放としての死」は低かった。大山ら⁹⁾も看護学生は「死後の世界観」「死への恐怖・不安」が高いことを報告しており、同様の結果であった。また、麻野ら⁶⁾は、看護学生は他学部学生より、「死後の世界観」「解放としての死」「死への関心」「寿命観」が有意に高く、「死からの回避」は有意に低いと報告している。「死後の世界観」は、死後の世界あるいは魂や霊の存在を信じる考えであり、死にゆく患者のケア提供者として望ましい死生観であるが、「死への恐怖・不安」が強いと、死にゆく患者のケアを回避する傾向があり^{2,4)}、望ましくない死生観と考えられる。

日本と韓国の比較では、「人生における目的意識」と「死からの回避」は韓国が、「死への関心」は日本が有意に高かった。日本と韓国の看護学生の死生観に関する研究は少ないが、金⁹⁾は、日本の看護学生は韓国より死の不安尺度の得点が低いと報告し、道廣ら¹⁰⁾は、韓国学生の生きがいは、「目標に向かって努力する」「幸福の追求」「自己実現」「自己成長」などであり、死については、「来世」「自然の流れ」「恐怖」「回避」などと考えていると報告している。韓国の学生の方が人生における目的意識は高く、死を考えることを回避する傾向があると思われる。また、「死からの回避」は「死への恐怖・不安」と強く関連していることから、死を回避せず、死につい

てもっと考え、語り合うことにより、「死への不安・恐怖」を軽くすることが出来るのではないと思われる。

死別経験は長崎大学の方が多いの、臨終に立ち会った経験が少ないのは、日本の方が韓国よりも核家族化が進んでおり、また、病院で亡くなる人が多いため¹¹⁾と思われる。子供時代に臨終に立ち会った経験をもつものは、死への関心が高かった。しかし、現代社会においては、多くの人は医療施設で死を迎えており、子供が臨終に立ち会うことは少ない。在宅医療が進み、自宅や家族が付き添えるホスピスなどで死を迎える人が増えれば、臨終に立ち会う機会も増えると思われる。子供時代の家庭での死の話題に関しても両国で違いが見られ、日本の方が大っぴらに語られていた。子供時代に死について大っぴらに語った記憶があるものは、死を恐ろしいものとして回避せず、死について深く考えていた。大人は子供を死から遠ざけるのではなく、身近な人の死を通して、生と死について話しあう機会を持つことが、子供の死生観形成により影響を与えられる。

死生観に及ぼす宗教の役割について、重要と考えるものは韓国が有意に多かった。そして重要と考えるものは「死後の世界観」「死への関心」「寿命観」の得点が高かった。さらに自己の死生観は宗教に影響を受けたと考えるものは、「死への恐怖」「死からの回避」が有意に低かった。すなわち、宗教を信じるものは、死について深く考えるようになり、霊や死後の世界を信じ、死を恐れたり、回避することが少ないと言える。金⁹⁾は、死の不安と宗教・宗教観は相関しないが、宗教を人間の弱さの現れと捉える人ほど死の不安が強く、自分の死に直面する心の準備ができていて、しっかりと死生観を持っているほど死の不安が少ないと述べ、特定の宗教を持たない日本の学生よりも韓国の学生のほうが来世観を持つ人が多いと報告している。本研究でも有意差はないものの、「死後の世界観」は韓国が、「死への不安・恐怖」は日本が高い傾向が認められた。

韓国統計庁の調査(2005年)によると、韓国の宗教人口は総人口の53.1%であり、仏教が22.8%、キリスト教が21.4%である。また、儒教の教えも日本より強く残っている。日本では宗教人口に関する公式調査はないが、一般に日本人は信仰心が薄いと思われる。しかし、多くの人が正月には神社に初詣に行き、お盆には先祖を供養している。また、お宮参りや七五三は神社に行き、結婚式は教会であげ、葬式・法事は仏教で行うなど、日本人は多神教かつ多重信仰である。私たちが長崎大学の看護学生を対象に行った研究¹²⁾において、自分にとって死とはという質問に、生命の終わりや答えたものは半数以下(43.0%)であり、永遠の眠り・憩い(29.6%)、霊魂は生き続ける(12.6%)、死後の生命の始まり(4.8%)と答えていた。山崎¹⁾が述べているように、盆や正月などの行事の背景にある祖霊信仰やアニミズムが、若者にも息づいていると思われる。

自己の死生観に影響を与えた要因は、日本、韓国とも「身近な人の死」が最も多く、次いで「テレビ・映画」「葬儀への参列」であった。「自分の病気」が両国とも最も少ないのは、対象がまだ若い学生であり、大きな病気をしたものが少ないためであろう。「家族の病気」をあげたものも多く、家族や身近な人の病気や死は死生観に大きく影響することが示唆された。「読書」は「テレビ・映画」と同様、あるいはそれ以上に生と死について考えるきっかけを与えてくれる。最近の若者は本を読まなくなったと言われているが、教員は死生観形成に役立つような本を推薦したり、感想を話し合う機会を持つべきであろう。「講義」と「実習」に関しては、「実習」は両国に差はないものの「講義」は韓国が有意に低かった。韓国は日本よりも高齢化率が低く、老年看護に関する科目やホスピスケア教育、ターミナルケア教育あるいは死の準備教育が少ない¹¹⁾ことが原因ではないかと思われる。しかし、日本もまだ死の準備教育が十分に行われているとは言えず、学生一人ひとりが生と死の意味について考え、意見を述べあうことができるような教育を行うことが必要と考える。

謝 辞

本研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力いただきました長崎大学医学部保健学科看護学専攻および晋州保健大学看護学部の学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 山崎裕二：看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1)－「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業への導入。日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15: 89-96, 2002.
- 2) 竹下美恵子, 魚住郁子, 渡辺弥生, 伊藤豊美, 近藤里美, 寺田美恵子, 濱口高子, 今井範子：看護学生の死生観に関する研究 第3報－領域別臨地実習前後の比較－。日本看護学会論文集(看護総合), 32: 76-78, 2001.
- 3) 菊池和子：看護学生の死生観－Purpose-in-Life Testの分析より－。岩手県立大学看護学部紀要, 2: 91-98, 2000.
- 4) 大山由紀子, 沖野良枝：看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究。日本看護学会論文集(看護総合), 34: 75-77, 2003.
- 5) 糸島陽子：死生観形成に関する調査－看護学生と大学生の比較－。京都市立看護短期大学紀要, 30: 141-147, 2005.
- 6) 麻野幸子, 尾崎フサ子：看護学生の死生観－他学部の学生との相違－。日本看護学会論文集(看護総合), 36: 502-504, 2005.
- 7) 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 森川優子, 柏木哲夫：死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証－。死の臨床, 23(1): 71-76, 2000.
- 8) 垣田秀治, 大原昌樹, 岡田誠治, 佐藤純子, 国井修, 大島美智子, 平山正実, 柏木哲夫：アジア各国の死生観の違い。死の臨床, 7: 144-145, 1984.
- 9) 金伯姫：死の不安と死生観に関する日韓比較研究。大阪大学大学院 人間科学研究科 修士論文：1996 (<http://rinro5hus.osaka-u.ac.jp/ronbun/1996/kimu.htm>).
- 10) 道廣睦子, 岡須美恵, 橋本和子, 安東勝弘, 安福真弓, 名越恵美：日本と韓国の看護大学生の生と死に対する意識の比較。看護・保健科学研究, 4(1): 13-21, 2004.
- 11) 小林裕子, 柳原清子, 清水みどり：韓国でのターミナルケアの現状と方向性－在宅ケア, ホスピスケアをふまえて－。新潟青陵大学紀要, 6: 183-196, 2006.
- 12) 田代隆良, 永田奏, 出田順子, 安藤悦子：看護学生の死生観の学年間比較。保健学研究, 19(1): 43-48, 2006.

Comparison of a view of life and death between nursing students in Japan and Korea

Takayoshi TASHIRO¹, Junko IDETA², Kanade NAGATA²,
Etsuko ANDO¹, Tong Hyuk Choi³, Baek Myung Wha⁴

- 1 Department of Nursing, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University
- 2 Former Student of Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University
- 3 Division of International Tourism, Jinju Health College
- 4 Department of Nursing, Jinju Health College

Abstract A questionnaire survey about a view of life and death was conducted in 127 nursing students in Japan and 191 in Korea. "View of the life after the death" "fear of the death" and "purpose in the life" was high, and "avoidance from the death" "view of the life" "the death as a release" "interest in the death" was low in Japan and Korea. "Interest in the death" was higher in Japan, and "avoidance from the death" and "purpose in the life" were higher in Korea. "Fear of the death" was strongly correlated with "avoidance from the death". The nurse who cares for the dying patient should have a little "fear of the death". Therefore, it is necessary to have the opportunity to think about a life and death in childhood, and to have a death education by a lecture and nursing training in both countries.

Health Science Research 19(1): 49-54, 2006

Key Words : view of life and death, nursing students, Japan, Korea